

[第15回]

水陸両用の身体：ロシアのシンクロナイズド
スイミングの選手の恐るべき循環の秘密

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科システム血拴制御学

Ikuro Maruyama 丸山征郎

環境や設備問題、直前のジカ熱問題で開催が危ぶまれていたリオでのオリンピックもさしたる問題もなく、無事終了した。私が一番関心を持っていたマラソンは男女ともに惨敗で、大いに落胆したが、想いもよらないところで、ひとつの大きな収穫があった。それは人間の心身の可能性の大きさ、深さという点に対する驚愕である。今回はそれを血液の循環という視点から眺めることとする。

ヒトの体内に潜む恐るべき
適応能と可塑性・可能性

オリンピックや一流選手の競技を観ると、とても人間ワザとは思えないパフォーマンスや記録に驚嘆する。いったい、彼ら、彼女らの心身機能、小脳機能・運動神経はどうなっているのか、と医学生理学的な疑問を抱く。さらに、パラリンピック選手をみていると、生来の、あるいは何かの不慮の事故で、突然わが身に振り掛かってきた身体機能のハンディキャップに負けることなく、驚くべき新たな機能を獲得している。まさに感動と驚嘆である。たとえば、バスケットボール競技では、車椅子を見事に操り、恐るべき完成度で試合

をする。両手で車椅子を巧みに、激しく操りながら、一瞬車輪から手を放し、パスやシュートをするのである。盲目選手の競技も、相撲や柔道などの格闘技のほか、水泳、テニス、サッカーなどがある。水泳競技の場合には、選手は水面の波の強弱、音などで自らの位置関係を察知し、ゴールやターンの間際になると、コーチが棒で頭を軽く叩いて送る合図を鋭く感知して、激突を恐れることなく泳ぎ切る。一方、テニスやサッカーなど球技類では、音を発するようになっているボールを瞬時に感知して対応し、競技する。いずれにしろ、彼、彼女らは、障害を負うまでは心身の奥深く眠っていた機能を新たに呼び覚まし、そしてそれを日々の努力で恐るべき完成度に高めている。

私はオリンピック、パラリンピックの演技や技術、競技を観ると、われわれ“健康人”(カッコ付き)は「潜在的に心身の奥深くにしまわれ、眠っている能力を1%も使わないうち」に一生を終えてしまうのではないかと、思うのである。しかし選手らは、われわれが使ってない機能を極限の訓練の末、呼び覚まして未踏のパフォーマンスをする、これがオリンピック、パラリンピックで金メダルに繋がる……のだと。